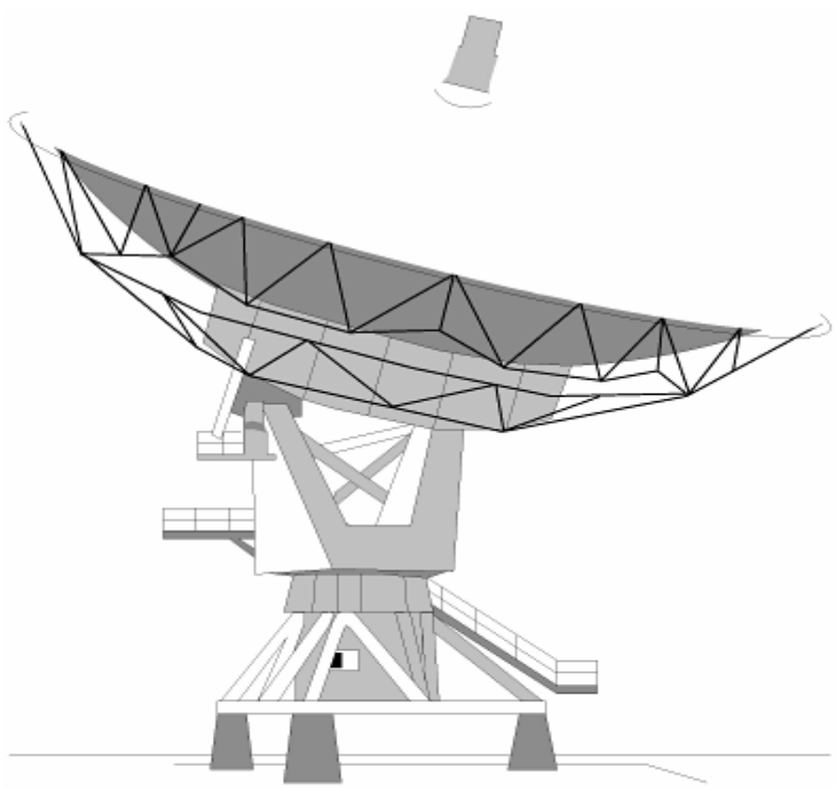
ミ　ニ　情　報



Mainichi　Media

Speedy　迅速に

Correctly　正確に

Politely　丁寧に

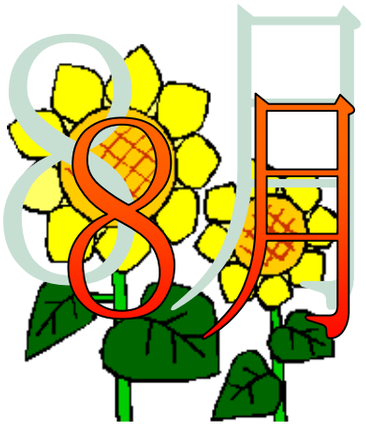
No.２２８　　２００５年（平成１７年）８月号

株式会社 毎日メディアサービス

http://www.m－media.co.jp

◎福 岡本部　〒812-0004　福岡市博多区榎田１－７－17
Tel（代）092－471－1122　Fax 092－474－6466

◎北九州本部　〒800－0251　北九州市小倉南区葛原５－３－３
Tel（代）093－475－0300　Fax 093－475－4750



戦争と　畳の上の　団扇かな

三橋敏雄

戦場から命からがら生還した兵士の目の前に、夢にまで見た我家がある。玄関を入るとなつかしい家の匂い、大きな柱時計、蠅帳の置かれた卓袱台、何も彼もが出征前と変わらない。ようやく我家に帰ったという安堵感。平和の象徴として見たのが、畳の上に置かれた団扇だった。

終戦から60年、戦争を知らない世代はこの旬にどんな情景を思い浮かべるだろうか。

夏の海　水兵ひとり　紛失す

渡辺白水

あの戦争で日本軍はいたずらに多くの若者の命を死に追いやった。一兵卒の水兵1人いなくなったところで、痛くも痒くもない。〝水兵ひとり紛失〟に過ぎなかったのだ。その事実さえ知らなければ、何ごともなかったように広がる夏の海。しかしその海底には無数の尊い命が沈んでいるのだ。

徳は在りて険に在らず

史記　呉起列伝

ある時、魏の武侯が西河を舟で下っていて中流にさしかかったとき将軍の呉起に向っていった。美しいなあ、この山河の険阻な眺めは。これこそ魏国の宝である」と。

すると呉起が「国家の宝とすべきは君主の徳であって、地形の険阻ではありません」といい、古くから地形が険阻であっても君主が暴虐であったために滅んだ例をいくつも挙げて武侯を戒めた。

□データ　１～３頁
＊６月全国スーパー売上高 2.2%減、百貨店 1.4%増
九州・沖縄大型店販売額(６月)　16ヵ月連続前年割れ
＊７月の乗用車販売ランキング　カローラが首位
＊ソニー全米１位　ブランド番付　６年連続で

□九州・山口　４～８頁
＊九州７県観光バトル　薩摩の黒豚 VS 大分関アジ
＊秋のダリアで集客　庭園９月オープン　ハウステンボス
＊和牛、下関ブランドに　下関市、出荷頭数拡大へ
＊転出超過　九州は８年連続　沖縄・福岡は増
＊レジもセルフ化　福岡のスーパー専用機導入

□住まいの情報　９頁
＊外壁に塗り散水、室内ひんやり　ＴＯＴＯなど新開発

□カー情報　10～12 頁
＊世界で四輪 400 万台　売上高 10 兆円以上　ホンダ
＊トヨタ高級車〝逆上陸〟レクサス　富裕層取り込み
＊アルマーニの似合う自転車　大阪の町工場から

□外食産業　13～16 頁
＊「屋台カー」快走　中華やコーヒー、企業参入
＊なぜなぜ繁盛店　こだわり押しつけぬラーメン
CHABUYA　JAPAN
＊おにぎり店拡大　来年末 100 店計画　宅配ピザのウイリー
＊パティシエ家庭に派遣　リーガロイヤル

□人　ひと　17 頁
＊地域とのつながり強化
山形屋　社長　岩元　修士 氏

□売れ筋　18～19 頁
＊人気商品・新製品

□話題　20～24 頁
＊新ブランドで市場に〝喝〟売上高 500 億円目指す　資生堂
＊ＨｏｗＴｏ商い　観察眼こそ接客の極意
＊客室エステ　２泊 33 万円　キャリア女性に的　帝国ホテル
＊古本詰めて電話下さい　通販の空き箱に
ニッセン、ｅブックオフ
＊女性 85.59 歳　男性 78.64 歳　平均寿命、５年連続新記録

□ネットビジネス　25 頁
＊ネットスーパー拡充　1000 品目増　店頭と連携　西友

□ユニークな店舗訪問　26 頁
＊屋上飲食街、庭園もスパイス　高島屋立川店

□データ　27 頁
＊全国主要スーパー６月販売実績　前年比 2.2%減
ネット広告費　新聞の半分に　５年で３倍超の急成長

□ホームページ　28 頁
＊上野彦馬賞フォトコンテスト　ご案内　他

株式会社 毎日メディアサービス

豊葦原水穂国　・・葦から稲、そしてセイタカ・・・

私の夏のウォーキングコースの途中には池が三つある。その一つはテニスコートときにはバシャッと大きな音をたてて一メートル近い鯉が跳ねたり、朝の風に騒ぐ葦の間から小さな水鳥の番が姿を現わしたりして目を楽しませてくれる。

そこから歩いて三十分、線路下のガードをくぐると広い田んぼに出る。水をたたえた田には五十センチにも成長した稲が青々と続き、田を渡る風が汗ばんだ身体に気もちいい。

葦、穂（稲）、水。「豊葦原水穂国（トヨアシハラミズホノクニ）」という言葉が頭を横切る。わが国は神の意によって稲が豊かに実り、栄える美しい国である、その日本国の美称だと小学生の頃から教えられたこの言葉が最初に使われるのは「古事記」である。

高天原を追放されたスサノオの子、大国主は苦難の末、出雲地方の国造りを終える。するとアマテラスはその「豊葦原千秋長五百秋水穂国（トヨアシハラチアキノナガイホアキミズホノクニ）」を譲れと、アメノオシホミミ、次にアメノホヒを送るが何れも失敗、次にやって来たタケミカヅチは大国主に剣を突きつけて「葦原中国（アシハラナカツクニ）」を譲れと迫り、大国主は、自分を神として祀ることを条件に国を譲る。こうして造営されたのが出雲大社である。

次にいよいよ天孫降臨となる。「葦原中国」は平和になったと聞いたアマテラスはホノニニギに「豊葦原水穂国は、汝知らさむ国ぞ・・天降るべし」と命令し、ホノニニギは高千穂の峰に降り立つ。

ここで目につくのは、オシホミミ、アメノホヒ、ホノニニギ、タカチホのホが全て（稲）穂を負った名であり、ホノニニギの名もアメニギシクニニギシアマツヒコヒコホノニニギノミコトという稲穂の豊かに実ることを呪するものであるということである。

国土のほとんどが葦に覆われていた太古の日本、人々は採集狩猟の生活を送っていたが、大陸から稲が入ってくると、その葦を払い、土地を耕して米を作り始める。葦から稲へ、稲作農耕の生活が始まり、やがて国中がみずみずしい水田に囲まれ、秋には黄金色に輝く稲穂の垂れる水穂の国へと変わって行くのだが、一方、その国は、国中の到る所で地方の部族、あるいは豪族の間の止むことのない争乱の続く〝騒げる国〟でもあった。そんななか、大和に生れ、次第に強大となった一つの勢力が、やがてそれら「葦原中国」を次々に攻めてそれを滅ぼし、あるいは支配下に収め、遂にその全てを平らげてしまう。

「豊葦原水穂国を治めよ」という「古事記」の言葉は、その大和勢力がこの国の王として王権を樹立したという宣言であり、その王は、この国の水穂の豊穣を支配する神であると宣言した言葉なのである。

戦後、天皇は国の象徴となったが、宮中では現在も天皇が自ら稲を植え、それを刈る神事、「古事記の世界」が続いている。

勝手な古事記解釈をしながら歩いていると年々増える休耕田が目につくが、葦ならぬセイタカアワダチソウの生い茂るその風景には目を背けてしまう。

豊葦原水穂国はどうなるのだろう。

貝瑯吉